

第4回 将来ビジョン検討会議 意見交換概要

(出席者)

- ・新聞社で「コウノトリ」の取材を行っている。3人の先生から「コウノトリ」のキーワードが挙げられ、私たちの活動の方向性が間違っていないことを認識し、意を強くした。
- ・当社の活動の概要を説明すると、昨年創刊110周年を迎え、福井の素晴らしい自然環境を将来の子どもたちに残すこと、自然環境をターゲットにしたキャンペーンを展開することになった。その自然環境を考えるシンボルとしてかつて福井県の空を飛んでいたコウノトリがもう一度棲めるような環境を取り戻せないかということを目標に取材活動を行っている。
- ・県内でコウノトリを呼び戻す活動をしている越前市白山地区にコウノトリ支局を設け、コウノトリの餌となる農薬を使わない田んぼ、米作りの苦労、意義、大切さをただ報じるだけでなく体験を通した記事として伝える活動をしている。
- ・並行して生き物の視点でその置かれている現状を紹介した「生き物たちのSOS」という連載を行ったが、様々な読者からの反響があった。「どうして、福井新聞は生き物のことをそんなに大切にするのか。私たちの生活があつてのことではないか」「農薬を使わない田んぼ作りといっても生き物のためになることをすれば私たちの生活は潤うのか」という率直なものであるが、その都度悩み、私たちの取材活動はどんな意義があるのかと立ち止まって考えた。
- ・昨年、環境先進国と言われるドイツを取材した。ドイツは風力発電、バイオマス発電等の自然エネルギー開発に力を入れる一方で、コウノトリの仲間と言われる「シュバシコウ」と共生している。万単位の風車がありシュバシコウ等野鳥とぶつかる被害も出ているようで、「自然エネルギーの開発、野鳥の保護、どちらも自然環境を保護することであるが、どちらを優先するべきか。両立していかなければならないと思うが。」と現地の野鳥保護の専門家に尋ねると、「何を野暮な質問をするのか」という顔で私を見て、「両立の努力は必要だが難しい面もあり、それぞれの立場で考え、全体として両立できれば良い」というニュアンスの回答であった。軽々しく「両立」という言葉を使えないと感じた。

(司会)

- ・環境と我々の生活、経済の問題とどちらが大切なのかという論点があるが参加の若い方にご意見をいただきたいと思います。

(参加者)

- ・中山間地の方たちは自分たちの生活が大事と考えているのではないか。対策がされていないこのような方たちへの対策が今後の課題である。

(参加者)

- ・40～50年前に様々な公害問題が発生する中、作家の有吉佐和子は「複合汚染」という小説を「見える公害、見えない公害」というキーワードで書いた。彼女は小説の最後に「見える公害はいずれ無くなるだろうが、いずれ見えない公害が出てくるであろう」と警告し結んでいる。確かに日本は公害が少なくなったが、今後中国、インド等新興国で公害が発生するとう視点で世界を見る必要がある。
- ・また、植物、動物等、人間以外の生き物といかに共生するかを原点にしないとこれからの先の環境問題は述べるできないと思う。このことでどなたか意見をお聞かせ願えればと思う。

(司会)

- ・見えない公害と共生の話ですがいかがでしょうか。

(出席者)

- ・共生については、私も同じ立場を取っている。決して人間優先の考え方ではない。日本人は総じてそのような考え方でないかと思う。日本の自然観は、自然全体の中の生物の一つとして人間は存在しているというもので、人間が上に居るとするのはむしろヨーロッパの考え方であると思っている。

(司会)

- ・ありがとうございました。

(出席者)

- ・人間はこの世に存在してから環境破壊が始まっているのではないか。良い生活をしたという人間の欲、エゴが様々な環境破壊に繋がってきた。政治家となると、環境のことだけでなく、産業や社会等いろいろな分野のことも考えていかななくてはならないのだが、岡先生の（CO₂削減目標達成のためにはマイナス成長を受入れる社会でなければならず、）マイナス成長でも雇用を増やせるという意見に興味を持った。人間は欲を捨てて地球のことを考えていかなければならない。人間は自然に還れるのかということが一つの問題ではないだろうか。

(出席者)

- ・日本よりずっと貧しい国に雇用がある事実から、GDPの大きさと雇用とは直接の関係はない。また、プラス成長でないと雇用が維持できないのは、消費が少なすぎるから投資していかないと雇用が維持できないという関係である。逆に言えば、消費支出さえ十分に大きければ投資しなくても雇用できるので成長しなくて済む。そのためには、マイナス成長でも人が消費するようにならなければならない。それは安心社会である。もし、民間が消費しないのであれば政府が支出してそれを補う必要がある。これから政府支出が重要になってくると思う。
- ・環境と経済の対立があると一般に認識されているが、経済も私的経済部門と公的経済部門で全く違う。有機農業を私的市場競争に委ねたら絶対ダメで、補助金等の公的なものが関与しなければいけない。公的なものが関与すれば、関与された経済と環境は両立するという関係である。

(司会)

- ・価値の転換、発想の転換の話について、補足をお願いします。

(出席者)

- ・価値の転換ということであるが、積極的に変えようとするとは今後10～20年間位が勝負で、実際は我々より下の世代が担うことになるだろう。その世代は成長を経験しておらず今の状況が常態化した社会で過ごしてきた。成長を経験したか否かではベースが全く違い、経験をした我々の世代がこれまでと逆の発想で若い世代と一緒に考えながら発信できるかである。

(司会)

- ・関連でご意見ありますでしょうか。今の価値の転換、発想の転換については、若い世代への教育ということにもなり、県の環境計画は環境教育の大きな柱になっています。安全環境部長、何かありますでしょうか。

(安全環境部長)

- ・県では一昨年環境基本計画を策定した。環境教育を一つの大きな柱にしているが、福井県には山、海、里等の豊かな自然に恵まれているにも拘らず、自然に親しんでいないという実態がある。そのため、小中学生に遠足等の機会を使って環境に親しんでもらうよう働きかけている。
- ・また、環境教育の副読本を小学校低学年用、高学年用、中学校用の三種類を作成し、教育委員会の協力のもと授業で使用してもらっている。

(司会)

- ・市町の方、様々な取組みをされていると思いますが、どなたか市町の取組みをご紹介ください。

(参加者)

- ・福井市では環境パートナーシップ会議という団体があり、環境教育にも積極的に取り組んでいます。特に今年度から「エコカレッジ」を設立し取り組んでいます。

(参加者)

- ・白山地区という中山間地域のコウノトリを呼び戻す農法に取り組んでいる地域の団体が、地域づくり含めて積極的に活動している。また、昨年11月、俳優の柳生博さんをお迎えして里地里山フォーラムを開催し、多くの方に参加いただき、自然環境、有機農法等について活発な討論がなされた。

(司会)

- ・このような取組みが広がっていますが、国（環境省）の大きな考え方があると思います。

(出席者)

- ・私も越前市の白山地区を訪れたが、印象にあるのは住民の方々が積極的に協力しようという意識がある。自分たちの地域、豊かな自然に対する誇りがあり、子どもたちへの環境教育に活かしている。
- ・日本の中で環境教育の先進地区は兵庫県の西宮市であると思う。平成15年に環境学習都市宣言のもと、市をあげて熱心に取り組み、20年近くの歴史がある。
- ・なぜうまくいっているかという点、子どもだけでなく住民、企業も取り組んでいる。但馬酒造、コクヨ、伊藤ハム等が環境教育を全面的にバックアップしている。
- ・環境教育を学校で行うだけでは効果がない。先生が環境教育のやり方について学ぶ機会もなく総合学習でどういうことを教えるか悩んでいる。企業、地域の役割が大きい。
- ・福井県は日本でトップクラスの里地里山地区を備えており、環境教育を行うのに有利である。平成9年の文部科学省の調査によると自然との触れ合いが多い子どもは、人に対する優しさや思いやりを持っているという結果が出ており、今の教育に足りないものを補えるのである。

(出席者)

- ・先ほど「見える汚染、見えない汚染」という話があったが、事業者や関係者は環境汚染があることが分かっているにもかかわらず経済を優先することで、被害が出るまで対処をしなかった。このような大きな教訓を得て、今大気汚染や公害が無くなった。このことを環境先進国として世界に発信すべきである。
- ・同時に、これだけの勉強をしながらまた、大きな犠牲を払いながら、地球温暖化について深刻な問題として自覚している人、実際に行動している人は依然として少ない。少しでも関心をもつためには、地域の地球環境を守ろうとする運動に何らかの形で参加することである。環境税も有効だと思う。

(司会)

- ・企業や経済の話も出ているので、経済の方からどなたかお話をください。

(参加者)

- ・先ほど発言の通り、欲がある限りは環境との共生はかなり難しいと思う。また、環境への取組みもお任せではなく、当事者意識を持たないといけない。エコという言葉はとても便利で世間に浸透した。環境と経済の両立のためにエコポイント、エコカー減税等の施策が取られているが、私たちは、補助金がある等自分に対するメリットを考えることだけでしか取組めていない。取組む姿勢を浸透させていくことが重要である。
- ・国レベル、県、市レベルで環境に対する取組みの成功例があったら教えて欲しい。

(出席者)

- ・一般論としてドイツが成功例である。成功例を外に求めるのは分かりやすいが一旦日本、福井に持ち込むと、人口や都市構造の違いで立ち止まる。福井の特徴、あり方、将来どう変わっていくかで発想することをベースにしないと、悪い言い方だが、何かに依存している状態で、自発的な活動になっていかないのではないか。大きな視点は大事だが、身近で何ができていないか何をしたらよいかを基に話し合いながら積み上げていくことが重要である。

(出席者)

- ・3Rで成功しているウェールズの古本の町がある。環境面で貢献した一つのまちづくりが、その後イギリス、世界中に広がったわけである。私もこれにヒントを得て、昨年10月に鉄道弘済会がバックアップしている神奈川県障害者施設・弘済学園に提案し、取組んでいる。表紙をきれいに拭いたり、サンドペーパーで磨いてきれいにしたり障害者の仕事づくりに役立っている。その古本

はアマゾンを通じて販売しているためリスクも少ない。

- ・もう一つはブラジルのクリチバ市である。日本の大阪大学の大学院を出た中村さんが指導し、ごみを分別して持ってきたら、重量の1/5の農作物と交換する「緑の交換事業」により環境都市になった。
- ・どちらとも他の真似でなく自分たちで考えたものである。

(出席者)

- ・コウノトリの現場の話だが、いかに仲間を増やし地域全体の取組みとしていくか、悩まれている姿を目にしている。兵庫県豊岡市は行政の支援がかなり大きいと聞いているが、行政が先導していくより、住民から自発的に出た取組みであることが何より大事であり、新聞社としても、行政としても、自然に広がるお手伝いをするべきではないか。
- ・福井県として注力すべきは食の安全、健康よりも、人間も生態系の一部で、まず、仲間である生物そのもののために、有機農業を広げませんかという思い切りがあってもいいのかなと思う。

(司会)

- ・実はもう一つ大きな論点が残っています。どなたか技術革新の話をお願いします。

(岡氏)

- ・技術革新は分からない、予想できない。技術革新が起これば解決する、もし起こらなければ成長を抑制するしかない。よって、技術革新またはマイナス成長である。

(司会)

- ・産業労働部技官、技術的な取組みについてご紹介いただけますか。

(産業労働部技官)

- ・環境問題を解決するのは技術開発であると考えます。これが技術の役割、使命である。環境問題の技術開発がこれからの成長分野の一つであり、皆さん取組んでいくのだと思うが、3R技術にしてもなぜ進まないかという点はまだエネルギー消費が多く、この点が解決されれば進んでいくのであろう。
- ・また、都市鉱山と呼ばれる希少メタルであるが、日本に一番埋蔵されており、回収技術も確立されつつある。

- ・福井県の特徴を活かした環境技術の取組みについて紹介すると、福井県には原子力発電というクリーンエネルギーがあり、電力の貯蔵分野、分散型発電、原子力発電から出る熱を利用して水素エネルギーを取り出す研究を行っている。また、三方五湖で電池駆動船を運航する計画も進んでおり、CO₂排出削減に貢献する。
- ・環境技術を生むには、環境を大事にする風土作りが大事だと思う。そのためには地域が一体となって取組まなければならない。

(出席者)

- ・人間の欲望は止めることができない。しかしながら、マズローの説にもあるように、環境教育の中で、社会に貢献する、自己実現するというより高い欲求に意識が変わっていけば、解決していけるのではないか。
- ・市町で様々な取組みがあるが、それに対して県がどのように関与していくのか考えていかなければならない。市町からの参加者の中で県にこうあって欲しいということがあればお聞かせ願いたい。

(参加者)

- ・あわら市では、エネルギー収支バランスのとれた総合的な環境政策の推進ということで、現在、北潟地区で風力発電の建設が進んでいるが、事業者の補助金、自然環境区域の問題等のことで、県の各担当から事業者に対してご指導、ご協力をいただいている。
- ・市町村が行うべき環境政策はこうあるべきであるというものがあれば、ご教示いただきたい。

(出席者)

- ・私が環境省にいた3年前の状況であるが、市町村は環境に対する取組みが弱かったのではないか。組織の面で環境を担当する部署がどこなのかという問題があり、県への連絡までに留まっていたのではないかと思う。
- ・これからの環境問題を考えると、市町村こそ環境問題推進の主役にならなければならない。本日申し上げたことは、市町村で取組んでこそ効果が表れる。また、県の役割は専門スタッフ、専門技術で市町村をバックアップすることであろう。

(出席者)

- ・ 県は県民に向けて、市町は市町民に向けてだが、枠と背景が違うだけで、実際の対象は同じである。県は県としての立場をベースに置きながら、半分は市町の立場として考える、市町は、県として大きな立場に立ったとき我々はどうだということをベースに考えることが大事であろう。双方がこのように考えればトータルは同じである。

(出席者)

- ・ 印象深かったのはこれからの環境問題を考える時、人間の欲望との関係をどうしていくかということである。しかしながら私たちの欲望が、経済的な豊かさでなく、自然環境の良いところでゆっくりゆったり暮らしたいというものに変わってきているのではないかと思う。欲望が変わり始めているからこそ、環境と経済と社会の調和の取れる社会がきっと構築できるのではないか。

(司会)

- ・ それではこれで終了させていただきます。本日は長時間に渡りありがとうございました。

以上